

「あの時にや、雲が低う降りて、おまけにすごい巻き風が起こつてようは見えなんだが、とにかく『どんぼり池』の上にや、どえらあもんが、二つ縄のようからんで登つてつたもんじゃ、おらあ、びつくらこうて、声も出せず、そこで気失つとつた……。」と。

それが、二匹の親竜の昇天であつた。

それから村は平和で、変わりはないが、ただ、夜ふけに川縁を歩く人々の口から、

「あそこを夜ふけに通ると、犬の遠吠えに似たわびしい泣き声が聞こえる。」

と言われていた。親竜の昇天した後、子竜が残つてその後を守っていたのかもしれない。

それから村は町となり、ついに「どんぼり池」も埋められることになったが、その時には、もう子竜の姿は見当らなかつたという。

横井 登

どんぼり池の話

〈第二話〉



どんぼり池 第二話

どんぼり池が、少しずつ、少しずつ、せぼめられていくとともに、あたりに住んでいた人びとも代を重ね、そこかしこには、新しい家が、ぼつぼつと、建ち並んだ。あとかたもなくなったどんぼり池も、竜の話も、いつしか人びとの心から、すっかり忘れ去られていた。

ある年の夏のこと。

うち続く日照りに、野も山も大地に生きるすべてのものが、びりびりする熱気に包まれ、水を求めてあえいでいた。

だれもかれも、空をあおぎ、

「どうか、雨を……。」

と、祈らぬ人は、なかった。

きょうもきょうとて、太陽は、朝からなさけようしゃもなく、じりじりと大地をやきつけていた。動くものさえない、この暑い日射しの中を、たつ、たつと、白い土ぼこりをあげながら、急ぎ足で歩いてくる旅の僧があった。

僧は、かつてのどんぼり池の真中あたりまでくると、びたつとあゆみを止め、両手を合わせて一心に、何かを祈っていた。

しばらくすると僧は、かたわらのきのかたむきかけた、古い草ぶき屋根の家へ入っていった。そして、暗い土間で念仏を唱えていたが、突然大きな声で、

「日照りが続くのは、子竜のたたりだ。池が埋められ、子竜は水を求め、ずっと苦しみ続けている……。そうじゃ、あれに子竜の執念が。」

この家のあるじ宗助は、この暑い時にいったいなんだろうと、たいぎそうに奥から出てきた。すると、見知らぬ僧が大声でしゃべっているの、ぼかんとして、つつ立っていたが、僧がきびしい顔をして指さしているのに気づき、あわててそちらの方を見た。

そこには、もう何が書いてあるのか、墨の色もおぼろげな、古びた竜の掛軸があった。

気まよう宗助は、掛軸と僧の顔をかわるがわる見ていた。

「どうか、おたのみ申す。たった一杯の水でいい。毎日、子竜のためにあの掛軸に、水を供えてやってもらえまいか。」

「そんな……。子竜のたたりだと……。掛軸に水を供えろと……。」

「たしかに、日照りは子竜のたたりだ。水を供えてやっつてほしい。水を供えてくれれば、子竜は必ずや、三日後の午の刻（十二時）に雨を降らせてくれるだろう。」

それだけ言うと、僧はどこかへ立ち去った。

「そんな、たたりなんて、ばかげたことが……。こんなきたない掛軸に水を……。アッハッハッハ——」。

宗助は、いせいよくわらったものの、なにか心の中でぶ気味なかんじがするのを、どうしようもなく、しばらく掛軸の竜をじっと見ていたが、何を思ったのか、小さな茶わんに水を一杯くんできて、掛軸の前にそつと置いた。

と、どうだろう。みるみるうちに、墨の色も黒々と、そこに一匹の竜が、くつきりと浮かびあがってきた。

まっさおになった宗助は、掛軸の前にひれふし、思わず手を合わせて、おがんでいた。

この話は、たちまち口から口へと、あたりへ広まっていった。

やがて、三日が過ぎた。

ちようど、昼飯になる頃であつたらうか。ゴオーツという地ひびきのような音と共に、あたりはにわかになす暗くなり、たたきつけるような大粒の雨が、どうどうと落ちてきた。

久しぶりの雨を喜ぶ間もなく人びとは、ふと思いだした。

「午の刻」

「午の刻に子竜が雨を。」

みな恐ろしさに、ほうぜんと立ちすくみ、はげしく降る雨とひび割れた地面をめぐけて、白くはうように流れていく雨水のゆくてを、ぼんやりとながめていた。

こ半刻（三十分）も、降りしきつただらうか、雨はばたつとやんだ。

われにかえつた人びとは、誰言うともなく、みんな宗助の家にかき集まっていた。

ほどなくして、みんなの手で小さな祠がつくられ、子竜をていねいにまつた。

宗助の竜の掛軸もまた、そこに奉納された。

それからというもののこの地に、洪水、かんばつの被害を受けたことはなかったという。ひと昔前まで川端に、まだその祠があつたと聞く。

梶田 千鶴子